

教科横断的な学びの素材としての昔話
— 大学生における日本の昔話の認知度と今後の展開 —

伊藤孝*・石島恵美子*・鈴木一史*・千葉真由美*

(2019年8月30日受理)

Folktales as a Subject Matter in Cross-Curricular Study
: Recognition of Japanese Folktales in University Students and the Future
Development

Takashi Ito*, Emiko ISHIJIMA*, Kazufumi SUZUKI* and Mayumi CHIBA*

(Accepted August 30, 2019)

はじめに

一般に、昔話は口承説話の一形態であり、民間で世代を越えて長く語り継がれてきた物語である。社会の近代化・核家族化等に伴い口承という側面は減少したが、先人による採録・再話の結果、書籍として多数公表されている。昭和の晩期以降、日本の昔話は民放テレビのアニメとしても人気を博し、広く親しまれた。また、本論文でも後述するように、学校教育において、昔話は小学校の低学年向けの国語科で、継続的に扱われている。

昔話はまた「民族の記憶装置」, 「主人公である子ども・若者が変化し、成長する様子を描く育ち方のストーリー」(小澤, 2009)であり、第一級の文化的財産と言えるだろう。そのような意味で、将来わが国で教壇に立ち、児童・生徒に大きな影響を与え続けていく教員が、日本の昔話についての基本的な素養を身につけておくことは重要なことと考える。口承という機会に乏しく、かつ日本昔話のテレビアニメのレギュラー放送も終了して久しい現在、教壇に立つ直前の学びの場である大学の教員養成課程において、昔話をどのように扱うべきだろうか。それを考える端緒として、ここでは、1) 現在の大学生における昔話の認知度、2) 国語科、社会科、理科、家庭科における教育素材としての昔話という点を議論する。

なお、本論文では、「教員養成課程教育における素材としての昔話」の章は分担者ごとに執筆し、それ以外の部分は著者全員による共同執筆とした。

*茨城大学教育学部（〒310-8512 水戸市文京 2-1-1； College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）.

大学生を対象とした日本の昔話の認知度調査について

大学生における日本の昔話の認知度、昔話と接してきた歴史を把握し、教育素材としての昔話を考える基礎資料とする目的で、以下のアンケートを実施した。対象者は、茨城大学の人文学部・教育学部の1～2年生（生年1998～1999年）を中心とした308名である。アンケート実施期間は2019年1月28日から2月1日とし、授業時間内の一部を用いて、10分程度で回答頂いた。アンケートはOffice365のMicrosoft Formsを活用し、回答者は各自のスマートフォンを通し、大学の学務情報サイトへログイン後、回答する方式とした。なお、「茨城大学における人を対象とする研究に関する倫理規定」を鑑み、プライバシーに関わる情報は一切公表しないこと、調査への協力は任意であり全ての質問に回答する必要がないこと、をアンケート調査依頼書に記載した。

設問は、出身地（都道府県）、性別、昔話の認知度である。ここではMicrosoft Formsの仕様、および回答時間の都合上、桃太郎、浦島太郎、かぐや姫、かちかち山、いなばの白兔、塩吹き臼（海はなぜ塩辛い）、花咲か爺さん、鶴の恩返し、ぶんぶく茶釜、耳なし芳一、姥捨て山、だいだら法師、雪女、牛若丸、ヤマタノオロチ、一寸法師、わらしべ長者、金太郎、こぶ取り爺さん、鼻たれ小僧の20話について、4:とてもよく知っている、3:なんとなく知っている、2:題名だけ知っている、1:聞いたことがない、の四件法で回答を得た。

また、回答者の昔話との関係を知る目的で、昔話にまつわる思い出やエピソードに関する自由記述欄を設けた。最後に、昔話の理解度を測るため、知っている最大二つの昔話のストーリーを簡潔に紹介頂いた。この設問については、以下の例を示した。【例】0.題名「笠地藏」、1.前提・発端、「笠売りのおじさんが、年の暮れにまちに笠を売りに行ったが、売れ残ってしまう。」2.出来事、「帰り道でお地藏さんが雪をかぶっているのに気が付き、売れ残った笠をお地藏さん一人一人にかけてあげる。」3.クライマックス・結末「おじさんが夜寝ていると、どしんどしんという音がして、朝起きてみると家の前に米俵がいっぱい積まれていた。お地藏さんが持ってきてくれたのでした。」

アンケート結果

アンケートの集計結果は以下の通りである。ここでは、その概要のみを述べる（図1、表1、2）。

表1 日本の昔話の認知度に関するアンケート回答者の出身地（合計308名）

出身都道府県	人数
茨城県	204
千葉県	23
福島県	13
埼玉県	8
栃木県	7
群馬県	6
静岡県	5
宮城県、東京都、神奈川県	4
北海道、秋田県、新潟県、長野県	3
青森県、山形県、長崎県、沖縄県	2
岩手県、愛知県、福井県、大阪府、広島県、山口県、徳島県、福岡県、鹿児島県、無回答	1

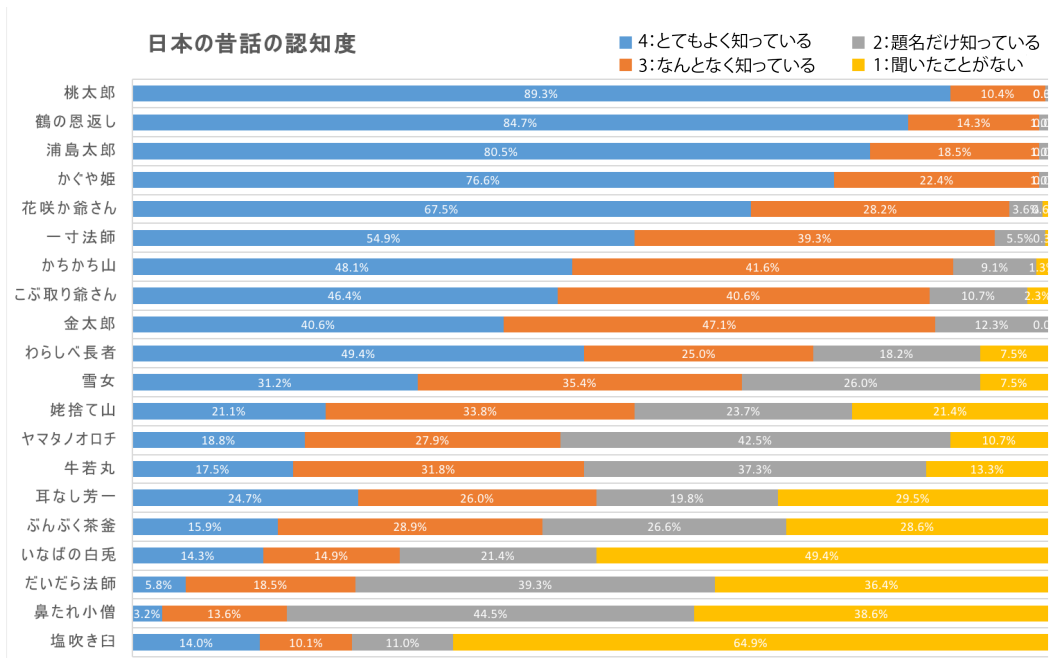


図1 日本の昔話の認知度に関するアンケートの結果

表2 日本の昔話の認知度に関するアンケートの結果（合計および性別ごと）

昔話	合計 (308名)		女性 (187名)		男性 (121名)	
	認知度	標準偏差	認知度	標準偏差	認知度	標準偏差
桃太郎	3.89	0.32	3.93	0.26	3.83	0.39
鶴の恩返し	3.84	0.39	3.86	0.38	3.80	0.42
浦島太郎	3.80	0.43	3.83	0.41	3.74	0.46
かぐや姫	3.76	0.45	3.83	0.39	3.64	0.51
花咲か爺さん	3.63	0.59	3.63	0.60	3.63	0.56
一寸法師	3.49	0.62	3.48	0.65	3.50	0.56
かちかち山	3.36	0.70	3.34	0.69	3.40	0.73
こぶ取り爺さん	3.31	0.75	3.29	0.76	3.35	0.75
金太郎	3.28	0.67	3.27	0.68	3.30	0.67
わらしべ長者	3.16	0.98	3.07	1.02	3.30	0.89
雪女	2.90	0.93	2.89	0.95	2.92	0.90
ヤマタノオロチ	2.55	0.92	2.37	0.87	2.82	0.93
姥捨て山	2.55	1.05	2.51	1.05	2.60	1.05
牛若丸	2.54	0.93	2.37	0.92	2.79	0.89
耳なし芳一	2.46	1.16	2.39	1.15	2.57	1.16
ぶんぶく茶釜	2.32	1.05	2.28	1.04	2.38	1.07
いなばの白兔	1.94	1.10	1.88	1.05	2.03	1.18
だいだら法師	1.94	0.88	1.87	0.86	2.04	0.92
鼻たれ小僧	1.81	0.79	1.76	0.69	1.89	0.91
塩吹き白 (海はなぜ塩辛い)	1.73	1.11	1.65	1.04	1.86	1.21

まず、回答者の出身都道府県は、北海道から沖縄まで27都道府県におよぶが、茨城県204名(66.2%)、千葉県23名(7.5%)、福島県13名(4.2%)と、この上位3県で全体のおよそ8割を占めた。男女を区別しない回答者全体における20の昔話の認知度(四件法の回答平均値)は、桃太郎(3.9 ± 0.3)、鶴の恩返し(3.8 ± 0.4)、浦島太郎(3.8 ± 0.4)、かぐや姫(3.8 ± 0.5)、花咲か爺さん(3.6 ± 0.6)、一寸法師(3.5 ± 0.6)、かちかち山(3.4 ± 0.7)、こぶ取り爺さん(3.3 ± 0.8)、金太郎(3.3 ± 0.7)、わらしべ長者(3.2 ± 1.0)、雪女(2.9 ± 0.9)、ヤマタノオロチ(2.5 ± 0.9)、姥捨て山(2.5 ± 1.0)、牛若丸(2.5 ± 0.9)、耳なし芳一(2.5 ± 1.2)、ぶんぶく茶釜(2.3 ± 1.1)、いなばの白兔(1.9 ± 1.1)、だいだら法師(1.9 ± 0.9)、鼻たれ小僧(1.8 ± 0.8)、塩吹き白(海はなぜ塩辛い)(1.7 ± 1.1)の順に下がる(表2)。また、男女間で大きな相違は見られなかった(表2)。

図1では、それぞれの昔話における前述した四件法(4:とてもよく知っている, 3:なんとなく知っている, 2:題名だけ知っている, 1:聞いたことがない)の回答数の割合を示した。この結果で明らかのように、桃太郎、鶴の恩返し、浦島太郎は、8割以上がストーリーを含め知っているのに対し、いなばの白兔、だいだら法師、鼻たれ小僧、塩吹き白(海はなぜ塩辛い)は、「とてもよく知っている」「なんとなく知っている」を合算しても3割に満たず、多くの人にとって、ほとんど馴染みのないことがわかった。以上、ここに挙げた20話に話を限った場合でも、昔話ごとに認知度に大きな相違があることが明確になった。同様の調査を行った向田(2012)と比較すると、共通に対象とした昔話に関しては、上位を占めるものはかなり類似している。

アンケート回答者が小学校の1～2年次に使用していた教科書は、平成17年度改訂版の教科書であり、その後平成23年度の改訂に至るまで使用されている。茨城県では、小学校では「光村図書」と「東京書籍」の教科書が採択され、現在に至る。この2社の教科書教材には日本の昔話の採録は少なく、東京書籍(角野ほか, 2005a~d)では、1年生に「どくしょのまど」という補助単元として「いっすんぼうし」「かにむかし」が紹介され、2年生の「読書のまど」では「はなさかじい」「びんぼうがみとふくのかみ」が示されている。そして読み教材として「かさこじぞう」が採録されている。光村図書(宮地ほか, 2005 a~d)では、1年生で「おむすびころりん」「おおきなかぶ」「たぬきの糸車」、2年生では「スーホの白い馬」が採られている。そのほか、両社とも1年生の初めに「おはなしききたいな」「おはなしよんで」と2つの単元が設定されており、読み聞かせの授業を行うような教材となっている。しかし、どのようなお話や絵本を読み聞かせするかは、授業者の判断が大きく、今回のアンケート結果との関連性は不明である。

教員養成課程における教育素材としての昔話

(1) 国語科

国語の教科書に昔話が採録されてきた期間は長く、現行の中学校国語の教科書を出版している五社すべてに「竹取物語」が掲載されている。したがって、中学1年次に日本の学校教育を受けた生徒は全員が「竹取物語」という物語を習っていることになる。物語全体の理解は、あいまいな点を多く残していることが本調査でも認められたが、かぐや姫の物語を知らない学生はいない。

昭和22年に学習指導要領の試案が出され、33年から告示されて法的拘束力を持つようになり、それによって教科書の性質も変化し、検定済み教科書として学習材が提供されていく。昔話は、そ

の初期の頃から教科書に採録される。

早い時期のものでは、1950(昭和25)年に中教出版から出された「国語の教室」に、「昔話」として、「一 小人の森 グリム」「二 麵食い虫 佐藤春夫」「三 焼き餅じいさま 関敬吾」「四 鬼にこぶ取らるること(宇治拾遺物語)」がとられている(新教育研究所, 1950)。1951(昭和26)年日本書籍発行の「国語生活 中学国語科用(文学編)」では、「昔話」の項目に「一 たにし長者」「二 かえるの王さま(グリム童話)」の2点が採録されている(中学国語編修会編, 1951)。しかし、これらはいずれも中学校用の教科書であり、昔話と古典入門の中間的な層としての位置づけと考えられる。現在の「竹取物語」の学習の系譜である。

小学校の教科書では、1958(昭和33)年教育出版「標準小学国語5上」の「伝説と昔話」の単元として、「第一の話 谷間のしみず」「第二の話 十六日ざくら」「第三の話 みょうが宿」「第四の話 はくがのふえに」があり(池田・坪田 監修, 1958)、1960年教育出版株式会社「標準国語1年中」には「昔話」「いっすんぼうし」が載せられている(池田・坪田 監修, 1960)。その後、昔話の単元はなく、1992(平成4)年光村図書出版「こくご 赤とんぼ2下」に「昔話を読もう」「力太郎」が登場し(栗原ほか, 1992)、表現単元として、1995年東京書籍株式会社「新編新しい国語3年下」で取り上げられる(山口ほか, 1995)。

平成10年の学習指導要領には、「内容の取扱い」の「C読むこと」に「昔話や童話などの読み聞かせを聞くこと、絵や写真などを見て想像を膨らませながら読むこと、自分の読みたい本を探して読むことなど」と記述された。

その後、平成20年告示の学習指導要領では、以下のような文言で昔話が述べられている。

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

(1)「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

ア 伝統的な言語文化に関する事項

(ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。

また、現行の学習指導要領では〔知識及び技能〕(3)我が国の言語文化に関する事項、第1学年及び第2学年「ア 昔話や神話、伝承などの読み聞かせを聞くなどして、我が国の伝統的な言語文化に親しむこと。」と記されている。

それぞれの指導要領で「昔話」の取り扱い方は若干異なっており、内容の取扱いから始まって徐々に指導事項まで拘束力が強まってはいるが、共通しているのは「読み聞かせ」の題材としての位置づけである。

読み聞かせの効果について桑原(2011)は、1989年の毎日新聞の調査結果をもとに、読み聞かせという言語環境がその後の学習者の読書量と密接な関係があることを述べている。特に、父親・母親の読み聞かせが「本の読書量」にプラスの影響を与えており、家庭環境の重要性が示されている。

ベネッセ(2012)の調査でも、「子どもへの読み聞かせ頻度が高く、時間が長いほど、子どもの1人読みの頻度も高い」ことが示されている。つまり、家庭での読み聞かせの読書体験があることが、自ら1人で読み進める自主的読書へと変換していくのである。

また、高萩市の「子ども読書活動推進計画委員会」においても、就学前の読み聞かせ活動の有無が、初等教育時の読書量と関係していることが報告されている。

学習指導要領において、昔話を読み聞かせの題材として活用することは小学校1・2年に設定されているが、これはその後の読書生活、ひいては言語学習に大きな影響をもたらすことを表している。つまり、就学前の読み聞かせを聞くという経験の有無がその後の読書姿勢を確定してしまうことを踏まえて、就学前の様々な家庭環境を考慮しつつ、いかなる学習者も基礎的な読み聞かせの読書体験をさせるという狙いが読み取れる。

その際の教材として、どのような文章でも読み聞かせをすることが望ましいわけではなく、適切な読み物が必要である。学習指導要領に倣えば、言語文化として読み継がれてきたもの、我々の価値観に深く根差しているもの等が良い。小澤（2009）は、昔話の帰属性をとらえ、昔話によって共通の風土意識が生まれることが帰属意識を生み出すと述べている。そうであるとすれば、「月」を見て、どのようなことを感じるかは、神話も含めた昔話によるところが大きい。反対に述べれば、教材としては、そのような伝統的文化的意識を継承させるような昔話が適しているといえる。

昔話の具体例として、現行教科書すべてに採録されている、物語の祖と言われる「竹取物語」「かぐや姫」を考える。

かぐや姫は月の物語である。異世界から来たものが人間界で暮らし、また異世界に戻っていく。その異世界が「月」である。「竹取物語」は作者不詳であり、まさに昔話である。伝承形態はさまざまに異なっているが、口伝のみならず、文字として継承され、物語の系統を辿ることができ、さらに物語の細部まで確定した文字表記のものが存在する点では、物語の祖である。

教科書などで採られる冒頭部分は、「今は昔、竹取の翁というものありけり。」（中学国語1年教育出版）（加藤ほか、2012）とはじまり、現行の中学校国語の教科書五社すべてにこの冒頭が示されている。この冒頭一文とはほぼ同様の文言が、万葉集に見られる。「昔老翁有り、号を竹取の翁といふ。」（万葉集 卷十六）。ただ、この話には月から来る姫は登場しない。翁が自分の若いころを語った昔話である。

その後、様々な紆余曲折を経て現在のよう形になるのは、室町時代の写本本である。それ以前にも「源氏物語」に「古りにたる御厨子あけて、唐守、藐姑射の刀自、かぐや姫の物語の絵に描きたるをぞ時々まさぐりものにしたまふ」などの記述がみられ、存在していたことが確認されているため、平安時代の成立とされている。

いずれにしても、平安時代から現代まで読み継がれ、室町時代にはほぼ現在のよう形で出来上がった伝承文学である。そしてこの物語の中で重要な役割をするのが「月」である。

かぐや姫が月から来て、月に帰ることは周知であるが、五人の皇子や帝に求婚される挿話については認知度が低い。これは、教科書教材が冒頭部分と結末部分だけを載せていることにも原因がある。冒頭部分は暗唱をさせるなど、教材として丁寧に扱うが、求婚譚の挿話の部分は、ダイジェストとして梗概を載せるにとどまっている。

今回、回答者が記述した「竹取物語」の概要でも、以下のように求婚譚を省く例がみられた。

○1「おじいさんとおばあさんがいた。」2「おじいさんが竹を切りにいくと光った竹があった。それを切るとかぐや姫がいた。」3「しばらくいっしょに暮らしていたが月に帰らなくてはならなくなり、帰ってしまうのであった。」

○1「お爺さんが竹やぶで光り輝く竹を見つける」2「光っている竹に入っていた女の子を連れ帰り育てる」3「美人に育ったかぐや姫は月へ帰っていった」または、男性に「もてた」とい

うような記憶を残している学生もいる。

○1「竹を取りにいったおじいさんが光る竹を見つけて、買ってみたら小さい女子が入っている。」

2「持って帰って育てたらめっちゃ可愛くなった。いろんな男に誘惑されるがなびかない強い女に。」3「天から迎えがくる。戦おうとするがさようなら。」

○1「おじいさんが竹を割ると小さな女の子が出て、育てる」2「みるみるうちにかぐや姫は成長し、多くの王に求婚される。」3「しかし、月から迎えがきて、かぐや姫は月へと帰る」

以上のように、かぐや姫のストーリーの記憶が曖昧であり、いろいろな欠落がみられるが、冒頭部分と月へ帰る終末の部分の理解は共通している。それだけ、学校教育で教材としての扱いが、大きな影響を後々まで残しているといえる。

この物語の月の意味は、我々の文化に大きな影響を与えていることは間違いない。平安時代の成立時にはすでに今昔物語などの仏教説話や中国の仙人思想などが混入していることがこの求婚譚を読むことで見て取れる。かぐや姫が無理難題として押し付けたものに「蓬莱の球の枝」があり、これは仙人が住む蓬莱山のことであり、「仏の御石の鉢」などは仏教伝承によるところが大きい。このような中国からの文物の導入と相まって形作られていった物語である。これらの複合的なものの見方が現代のわれわれにも息づいていることは明らかである。

その最たるものが、最後にかぐや姫が残した薬である。これは不死の薬である。ここにも仙人思想が現れているとも考えられる。しかし、この「不死」という考えや憧れは日本では根付かなかったように思う。この物語でも、最後にこの薬を捨ててしまう。そこから「ふじの山」と名付けられたという落ちである。

この不死の薬を捨ててしまうところに、中国の神仙思想とは異なる日本人の文化としての死生観のようなものが現れてはいまいか。

古来より月に関しての日本人の美意識が育まれ、かぐや姫の物語で多くの要素を含んだ月が完成する。その後、この物語が語り継がれ読み継がれてきたことを考えると、月の物語は我々日本人の美意識や価値観に強く根を張っているように思われる。

学習指導要領に昔話と併記されている神話について触れる。日本の神話の世界では、天照大神の太陽神とともに「月読命」という神が対照的に登場する。万葉集では、月読は神ではなく、月そのものを指すものとして読まれている。

あしひきの山橘の色に出でよ語らひ継ぎて逢ふこともあらむ月読の光に來ませあしひきの山きへなりて遠からなくに（卷四相聞）

しかし、月の神の音として、「つくよみ」というのは看過できない。「つく」が「つき」の変異であることは疑うべくもないが、その後ろに付く「よみ」があつた世であり、「黄泉」に通じることは容易に音から連想される。そして、このことが、かぐや姫の帰る場所である月の象徴として機能し、その贈り物が「不死の薬」であることを合わせて考えると、当時の人々が月を見上げるときに、単なる風流なものとしてだけ見ていたのではないことがうかがえる。かぐや姫が人間界という現世に降り立ち、人間の様々な様相を見、そして帰っていく。帰っていく先は元居た場所、人間でいえば、輪廻世界か黄泉の国のような異世界であろう。

このような不条理や死生観まで含めた物語を、子ども時分に読み聞かせすることが、その後の読書活動に大きな影響を与えることは、先の数値で示すまでもない。そして、このような我々の底流

に流れる価値観を含んだ昔話こそ、教育的な読み聞かせ教材として扱うべき作品である。

（鈴木一史）

（2）社会科

社会科で昔話を扱う場合、例えば、NHK教育テレビジョンの番組『昔話法廷』を用いた公民分野での学びなどが想起されるかもしれない。一方、昔話を「過去の話」、すなわち歴史の内容そのものとして扱うことは難しい。歴史の学びにおいては、史料から歴史の事実を読み解くことが求められ、口承説話を扱うには一定の限界があると考えられるためである。しかし、昔話が時代を超えて民衆世界に浸透し、長く伝えられてきたこと、その背景を考えることは、以下に示すように、歴史の理解においては重要な意味があると考えられる。

まず、アンケート結果で大学生の認知度が高かった「桃太郎」あるいは「金太郎」など、「男子」を主人公とする昔話の浸透に着目したい。現代人がイメージする「桃太郎」「金太郎」は、近世中期の造形と考えられており、そこには、家を継ぐ男子を重視し、たくましい子に育つよう願う親たちの気持ちが投影されたことが指摘されている（黒田，1993）。近世は民衆世界でも「家意識」が浸透し、家の継承が自覚されていくなか（大藤，1996）、親の子育てへの責任と「子宝」意識が定着した時代でもあった（太田，2011）。近世社会における家と家族のあり方、子どもへの視点の変化とかかわって浸透した昔話が存在したといえる。「桃太郎」「金太郎」ともに、多くの浮世絵や絵本が出版されたことも着目できるだろう。近世は多くの出版物が出された時代であり、口承の昔話が、文字によって広く伝えられる昔話になっていく状況があった。

そして、13世紀中期の橘成季による説話集『古今著聞集』に掲載された「養老の滝」にも注目したい（橘，1926）。老父のために働く息子が、山で薪を取ろうとしたところ、苔で転んでしまうが、そこに流れ出る水を見つける。流れ出ていたのは酒であったため、酒好きの父親に飲ませて養ったという話である。美濃国を舞台とするこの説話は、現在の岐阜県養老郡養老町の「養老の滝」として知られる。この「養老の滝」と類似の話が、茨城県石岡市で「子は清水」として伝わっている（石岡市史編纂委員会，1979）。貧しい親子がおり、息子が毎日、山で薪を取って生計を立てていた。老いた父親は息子が買ってくる酒を楽しみにしていたが、ある日は満足に薪が売れず、息子は途方に暮れた。息子が神仏に念じて歩いていると、木立ちの中に湧き出ている酒を見つける。これを持ち帰ったところ、父親は良い酒だと喜んだという。この酒は息子が飲むとただの水だったので、「親は諸白（上等の酒）、子は清水」と呼ばれるようになったという。「養老の滝」と同様に、親のために懸命に働く息子の孝養の話である。「子は清水」は茨城県だけではなく、福島県会津若松市、千葉県松戸市などにも類似の話が存在し、会津若松市では「強清水」、松戸市では「子和清水」という地名も残っている。

「養老の滝」あるいは「子は清水」のように、孝養を題材とした昔話は、近世社会において幕府や藩が奨励する孝徳の教えに合致する。幕藩体制社会における支配のあり方や教育、類似の昔話が各地に残されている意味など歴史的背景を踏まえることにより、昔話を通して社会のあり方を深く理解していくことが可能になるのではない。

（千葉真由美）

(3) 理科

自然科学的な視点から昔話・民話を包括的に研究した先駆的な例として、宮橋・齋木（2004）がある。彼らは、学校教育の影響を受けていない状況下で、日本人が何に内発的な興味・関心を寄せ、自然に対してどのような疑問を抱いていたのかを知る一つの手がかりとして、3407話におよぶ日本の民話を調査・分析した。結果、自然を主要対象・副次対象として扱ったものは、全体の21%（717話）にのぼり、その対象は、現在の教科理科の科目で分類すると、ほとんどすべてが生物と地学に該当することを明らかにしている。具体的な内訳は、生物：動物分野（50%）、生物：植物分野（17%）、地学分野（23%）、その他：超常現象や地域固有のもの等（10%）である。これらの解析に基づき、学校教育やメディアなどの影響を受ける以前の状態にある子どもは、内発的に自然物、特に生物学や地学的なもの・事象へ強い関心を持っていたと結論づけている。

宮橋の著書『民話が語る自然科学：見つめなおす郷土の風景』（宮橋，2009）や柳田国男の『日本の昔話』（柳田，1983）でも扱われている「海の水はなぜ塩辛い（上記アンケートにおける題名では「塩吹き白）」は、TBS系列で放送されたTVアニメ「まんが日本昔ばなし」の一つとして取り上げられ、平成23年度以降は一部の小学校国語の教科書でも扱われている（多比羅，2011）。世界的なベストセラーにもなったラブロック氏の『地球生命圏：ガイアの科学』では、ノルウェー版昔話の「塩吹き白」とともに、海洋底の拡大とそれによる海洋へのイオンの供給が紹介されている（Lovelock, 1979）。この昔話の「海底で塩を吹き出し続けている白」と、海底探査の結果、海底に実際にあった「塩吹き白」への展開は、地球表層における物質循環を議論する上で格好の題材と思われ、筆者の一人（伊藤）は永年TVアニメの「塩吹き白」を授業の導入として扱っている（伊藤・関，2006）。2017年以降、基盤科目でリフレクションカードとして採用している大福帳（向後，2006）の記述に基づけば、導入として扱った「塩吹き白」の印象は鮮明であり、多くの受講生が自発的にその感想を書き残している（図2、表3）。先に示したアンケート結果では、この「塩吹き白」

表3 大福帳に記述された「塩吹き白」に関する感想（抜粋）

2017年度	<ul style="list-style-type: none"> ・塩吹き白の話を知らなかったのですが、似たようなものが海にあることを知って詳しく知りたいと思いました。 ・昔話「塩吹き白」を見て、どこの国の昔の人も海の水が塩辛いのを不思議に思っていたんだなあと思った。 ・昔話の中に現在の科学で分かった事と共通する部分があるのはすごいと思った。
2018年度	<ul style="list-style-type: none"> ・塩吹き白の話を初めて知りました。名作だと思います。海が塩辛いことの原因を想像力を働かせて考える人は凄いと思いました。 ・海の水が塩辛いことも、現実に塩吹き白のようなものがあることが面白いと思いました。 ・石臼の話は小学生の頃みんなで見で、その時は割と真面目に信じていたなあと思い出しました。 ・海が塩辛い理由は今でこそ科学的に証明されているが、昔は物語で筋を通していただと改めてわかって面白かった。
2019年度	<ul style="list-style-type: none"> ・見つかった塩吹き白が想像していたよりも大きくて驚いた。 ・現代の私たちが常識として捉えている世の中の理を「塩吹き白」のようなお話として考えた先人の想像力には本当に脱帽です。いわゆる言い伝えと地学の分野とのつながりに対して興味が湧きました。

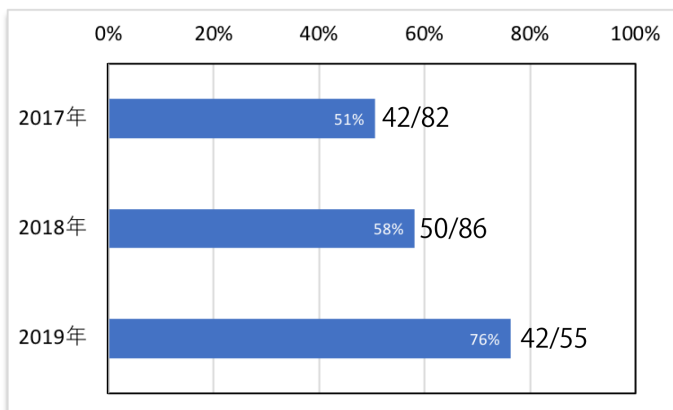


図2 授業後に記述した大福帳に「塩吹き白」について記述した受講生の割合

の認知度は非常に低かったが(図1, 表2), このように受講生にとって馴染みの薄い昔話であっても, 扱い方によっては, その後の学びへの動機付けに繋がることを示している。

(伊藤 孝)

(4) 家庭科

昔話において, 食べ物は様々な役割をもって描写されている。石井は, 食文化の視点から昔話に描かれた食べ物を論じている。物語の歴史的な背景を多くの引用文献を用いて多面的かつ体系的に検討した研究は他に認められないため, 本論文では石井が注目した昔話10編について, 食べ物がどのような意味や役割をもって描かれたのかを分類し教育場面への援用を検討することとする。

まず, 食べ物は昔話に命や生の象徴として描かれてきたことがあげられる。その代表とも言えるのが, 桃太郎や屁ひり嫁である。桃太郎における「桃」は, それを食べた媼が桃太郎を出産したという回春説と桃太郎が桃から出生したという果生説がある。どちらも, 「桃」の霊験性と呪力が認識され生が力強く描かれている(石井, 2009a)。屁ひり嫁における「屁」からは食べることが連想され, この話の語り手は食事摂取から排泄までの人間の生を表現(石井, 2011b)している。

その一方で, 食べ物を価値ある物質の象徴として描いている昔話もある。それは, 食べ物が豊富ではない時代のつつましいくらしから育まれた感覚が背景となる。食べ物が貴重であるからこそ様々な気持ちが生じ, 共感される物語が生まれる。よい心情を表す物質として, 感謝や恩返し的心を表現するために食べ物が描かれているのは, 笠子地藏が笠のお礼に届けた「正月を迎えるための数々の料理」(石井, 2012)や舌切り雀の母雀が小雀を助けた翁への恩返し「餅」などのごちそう(石井, 2010b)である。また, 桃太郎の「きび団子」は, 翁と媼が鬼退治に行く桃太郎の無事を祈念し作る。その思いの詰まった貴重な「きび団子」を, 桃太郎は犬, 猿, 雉子へ主従関係締結の証として与える。犬は「きび団子」に感激し, 当時の人気土産の餅よりもうまいと評し, 食を楽しんだことが記されている(石井, 2009a)。「きび団子」が逸品だったからこそ, 主従の絆はより深まった可能性もある。反面, 食べ物が元で負の出来事が展開されることもある。さるかに合戦では, 猿が巧妙に言い寄り, 蟹が持っていた「おにぎり」を「柿の種」と交換させる。さらに, 蟹がようや

く育てた柿の木に、木登りがうまい猿が先んじて登り「甘い柿」を全て食べ、「渋い柿」を投げつけて蟹を殺してしまう。殺された蟹の子どもの復讐心に共感した栗や白が協働で猿を懲らしめる(石井, 2010a)。かちかち山は、母狸を「狸汁」にされた子狸が仇討ちとして媼を殺し、「婆汁」を翁に食わせるところから話が展開される(石井, 2009b)。

そして、先述の食べ物価値ある物質の象徴である側面から派生して、食べ物は人の欲の象徴としても描かれている。それは、花咲か爺さん、和尚と小僧、郭公と時鳥、舌切り雀に顕著に認められる。花咲か爺さんは、子犬を助けたお礼に「餅」の詰まったお櫃や金銀財宝を手にするが、隣家の欲張り爺さんはその財産をだまして手に入れようとして罰が当たる(石井, 2010b)。和尚と小僧では、「餅」を独り占めして食べている和尚から、小僧がとんちを効かせて「餅」を食べさせてもらう笑い話である(石井, 2011a)。郭公と時鳥は、姉はいつも「芋」の柔らかいところを妹に食べさせていたが、妹は姉が美味しいところを独り占めしていると勘違いをして姉を殺し、その後、姉の優しさと自分の愚かさに気がつくという話である(石井, 2010c)。舌切り雀では、傷ついた小雀を心配して探す翁の優しさを示す描写として、優しい翁が馬や牛を洗った汚水を飲まなくてはならないような苦難を乗り越えるという描写であるが、欲張り翁の同場面は財宝を手に入れたい一心で行った行為として、欲深く浅ましい心情を表す描写となっている(石井, 2010b)。

最後に、食べ物をくらしの知恵の象徴として描いていることが挙げられる。その昔話は、馬鹿婿や愚か村話で、これらは食文化の無知を揶揄した話(石井, 2011c,d)である。食事作法や食の知恵は暮らしの中から派生し共有され、独自の教養として尊ばれてきたことが見て取れる。

これらのことをふまえて、家庭科教育において昔話を教材として活用する可能性を論じる。次期学習指導要領では、小学校・中学校・高等学校において生活文化の伝承の重要性が謳われ、伝統的な人々の暮らしを知ることで、生活の知恵に対する興味関心を向上させることが記載されている(文部科学省, 2018a,b, 2019)。

昔話を活用した授業をする際に気をつけたいのは、時代で変化する暮らしの合理性を批判的にも肯定的にも考察するということである。単に、懐古主義的な学びにとどまらないことに留意することが必要であると考え。そうすることによって児童・生徒は、現代の生活がこれまでの様々な創意工夫の上に成り立っていることに気づき、生活に対する見方や考え方を深める機会が創出しやすくなる可能性がある。

昔話を題材として用いる授業展開は、例えば、桃太郎の「きび団子」で地域創造をした実践例(加原, 2004)を援用した家庭クラブ活動や、調理の楽しさと昔話絵本の世界観を体験できるような「おむすびころりん」を教材として活用した調理実習などが考えられる。また、食べることの意義を考える学習活動の際に、児童・生徒が昔話に描かれてきた食文化の多面性を検討することで、これまでの食べ物の価値や可能性に思いを馳せるきっかけともなるだろう。

(石島恵美子)

教科横断的な学びの素材としての昔話：その可能性

ここまで述べてきたように、昔話では、道徳、生活、風物、心情等が広く扱われ、その滋味の豊かさにより、多分野からの検討が可能である。本論文では、予察的に、国語科、社会科、理科、家

表4 昔話と関連付け扱うことが可能な各教科の内容

国語科	社会科	理科	家庭科
かぐや姫	信仰（富士山） 貴族社会	月の満ち欠け	十二単 ジェンダー 和室のしつらえ
子は清水	幕藩体制 孝道德	地下水	家族（親子関係の変遷） 飲料水
塩吹き臼	塩の道 村	イオン 物質循環 海底熱水 消化	塩 精塩 食事 年中行事
おむすびころりん	思想（徳目） 民間信仰	地形	保育（絵本の読み聞かせ） 炊飯調理 伝統的な食文化

庭科，それぞれの観点から昔話を論じたが，教科横断型授業の題材としても多くの可能性を秘めているだろう。表4では，かぐや姫，子は清水，塩吹き臼，おむすびころりんの四つの昔話を例として挙げ，国語科，社会科，理科，家庭科の分野においてどのような取り上げ方が可能か，簡潔に示した。この表から明らかであるが，同じ昔話であっても，教科によって全く異なる観点から論ずることが可能であることが見て取れる。これまで教員養成系大学・学部においては，主に教科教育科目と教科専門科目の架橋という視点で主に議論され，論文も公表されてきた（深澤，2013，三村，2013，山崎，2016）。今後，「昔話は教科を繋ぐ橋」として位置づけ，教科専門科目を有機的に繋げる可能性を模索していく予定である。

謝 辞

本研究の一部は平成30年度茨城大学教育学部研究費特別配分，茨城大学2019年度研究推進経費（研究拠点への支援），日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究（B）（課題番号17H02008，研究代表者：鈴木寿志）の助成を受けて行われた。

引用文献

- ベネッセ. 2012. 『幼児期から小学1年生の家庭教育調査 報告書』 54-59.
 中学国語編修会 編. 1951. 『国語生活 中学国語科用（文学編）』（日本書籍）.
 深澤清治. 2013. 「英語科教員養成における教職と教科を架橋する構成原理を求めて（シンポジウム1）」『日本教科教育学会誌』 35（4），77-82.
 池田亀鑑・坪田譲治 監修. 1958. 『標準小学国語5上』（教育出版）.
 池田亀鑑・坪田譲治 監修. 1960. 『標準国語1年中』（教育出版）.
 石井正巳. 2009a. 「昔話に見る食文化 桃太郎」『食文化誌vesta』 75，64-67.

- 石井正己. 2009b. 「昔話に見る食文化 かちかち山」『食文化誌vesta』 76, 64-67.
- 石井正己. 2010a. 「昔話に見る食文化 猿蟹合戦」『食文化誌vesta』 77, 54-57.
- 石井正己. 2010b. 「昔話に見る食文化 舌切り雀」『食文化誌vesta』 78, 64-67.
- 石井正己. 2010c. 「昔話に見る食文化 郭公と時鳥」『食文化誌vesta』 80, 66-69.
- 石井正己. 2011a. 「昔話に見る食文化 和尚と小僧」『食文化誌vesta』 81, 64-67.
- 石井正己. 2011b. 「昔話に見る食文化 屁ひり嫁」『食文化誌vesta』 82, 66-69.
- 石井正己. 2011c. 「昔話に見る食文化 馬鹿婿」『食文化誌vesta』 83, 66-69.
- 石井正己. 2011d. 「昔話に見る食文化 愚か村」『食文化誌vesta』 84, 66-69.
- 石井正己. 2012. 「昔話に見る食文化 笠子地蔵」『食文化誌vesta』 85, 70-73.
- 石岡市史編纂委員会. 1979. 『石岡市史上巻』(石岡市) 618-620.
- 伊藤 孝・関 友作. 2006. 「大学における教養科目「地球科学」の講義方法改善の試み」『茨城大学教育学部 紀要 (教育科学)』(55), 9-21.
- 角野栄子ほか 34 名. 2005a 『新編新しい国語 1 年上』(東京書籍).
- 角野栄子ほか 34 名. 2005b 『新編新しい国語 1 年下』(東京書籍).
- 角野栄子ほか 34 名. 2005c 『新編新しい国語 2 年上』(東京書籍).
- 角野栄子ほか 34 名. 2005d 『新編新しい国語 2 年下』(東京書籍).
- 加原奈穂子. 2004. 「旅みやげの発展と地域文化の創造：岡山名物「きびだんご」の事例を中心に」『旅の文化 研究所研究報告』(13), 37-56.
- 加藤周一ほか 34 名. 2012. 「中学国語 1 年」(教育出版).
- 向後千春. 2006. 「大福帳は授業の何を変えたか」『日本教育工学会研究報告集』 2006 (5), 23-30.
- 栗原一登ほか 27 名. 1992. 『こくご 赤とんぼ 2 下』(光村図書出版).
- 黒田日出男. 1993. 「異界の子ども近世の子ども」江戸子ども文化研究会(編)『浮世絵のなかの子どもたち』(くもん出版) 216-222.
- 桑原 隆. 2011. 「言語生活者」『国語教育総合事典』 74-75.
- Lovelock, J. 1979. *Gaia: A New Look at Life on Earth*, Oxford University Press (邦訳は, ラブロック, J. 1984. 『地球生命圏：ガイアの科学』(工作舎)).
- 三村真弓. 2013. 「音楽科教員養成における教職と教科を架橋する構成原理を求めて (シンポジウム 1)」『日本教科教育学会誌』 35 (4), 71-76.
- 宮橋裕司. 2009. 『民話が語る自然科学：見つめなおす郷土の風景』(慶応義塾大学出版会).
- 宮橋裕司・斎木健一. 2004. 「理科教育の観点からみた日本の民話」『地学教育』 57 (6), 217-222.
- 宮地 裕ほか 34 名. 2005a 『こくご一上』(光村図書出版).
- 宮地 裕ほか 34 名. 2005b 『こくご一下』(光村図書出版).
- 宮地 裕ほか 34 名. 2005c 『こくご二上』(光村図書出版).
- 宮地 裕ほか 34 名. 2005d 『こくご二下』(光村図書出版).
- 文部科学省. 2018a. 『小学校学習指導要領解説 家庭編』(東洋館出版).
- 文部科学省. 2018b. 『中学校学習指導要領解説 技術・家庭編』(開隆堂出版).
- 文部科学省. 2019. 『高等学校学習指導要領解説 家庭編』(教育図書).
- 向田久美子. 2012. 「日欧の昔話の認知度 (1) -短期大学生の学年別検討」『駒沢女子短期大学研究紀要』 45,

39-47.

太田素子. 2011. 『近世の「家」と家族』（角川学芸出版）.

大藤 修. 1996. 『近世農民と家・村・国家』（吉川弘文館）.

小澤俊夫. 2009. 『改訂昔話とは何か』（小澤昔ばなし研究所）.

新教育研究所. 1950. 『国語の教室』（中教出版）.

橘 成季（著）・塚本哲三（編）. 1926. 『古今著聞集』（有朋堂書店）259.

多比羅拓. 2011. 「新・小学校教科書に見る昔話の内容」石井正己（編）『昔話にまなぶ環境』（三弥井書店）214-226.

山口明穂ほか25名. 1995 『新編新しい国語3年下』（東京書籍）.

山崎貞登. 2016. 「生物育成に関する技術の教科専門科目と技術科教育を架橋する教科内容学の構成原理」『上越教育大学研究紀要』35, 257-267.

柳田国男. 1983. 『日本の昔話』（新潮社）.